

■ 他産地は今、特別企画②

繊維産業文化継承の現状

岡谷、駒ヶ根の養蚕・製糸業に見る 一先人の偉業に学び、明日を探る一

尾州地域新世紀産業振興委員会特別プロジェクト

第一次大戦前の貿易

《輸出》：大正年間も生糸は輸出の中心であった。この年の全輸出額は6億3226万圓に達していたが、生糸はその約30%、金額にして1億8968万圓を稼いでいたのである。絹織物の羽二重も輸出されており、絹関係では36%になる。綿糸、綿織物も輸出されているが、毛織物に関しての輸出数値はみられない。

《輸入》：この時期の輸入では綿花が32%で最大である。綿花を輸入して国民の衣料素材としたほか、綿織物として外貨獲得の手段とした。毛織物に関しては輸入も輸出もなく、貿易産業としてはまだ確立されていなかった。

尾州産地で洋服用の4幅織機が初めて導入されたのは大正5年（1916年＝鈴鎌毛織）だったが、産地として4幅に本格的に取り組んだのは大正12年（1923年）の4幅織物研究会結成が契機だった。それまでに開発されていたウール着尺では洋服生地としての輸出はほとんど不可能であった。

その生糸輸出はいつまで続いたのか。

1930年（昭和5年）から第2次大戦まで、生糸輸出は極めて好調に伸びてきたが、戦後は長期低落を余儀なくされてきた。昭和40年（1965年）には逆に輸入が始まり、50年（1975年）に輸出はほぼ皆無となった。明治、大正、昭和初期のわが国経済を支えてきた歴史的役割を終えたのである。

主な要因としては①ナイロンなど競合繊維の台頭（昭和30年代）②円高の進展による輸出採算の悪化（昭和60年代）③工場の海外進出による空洞化（昭和60年代以降）④中国での生産増加、などあげられる。

最新の平成15年（2003年）の統計によれば生糸関係の輸出は原料で3億7500万圓（繊維貿易全体に占める割合0.003%）、糸で3億4,500万圓（同0.003%）となっている。

（出所＝化繊協会「繊維ハンドブック」）

